

年下↓婿さま

## 第一章

(……こんなに年下だなんて、聞いていないよ！)

私は正面に座った青年を見て、顔を引き攣らせた。

離れ茶屋風の雅趣に富んだ料亭の庭に、カッコーンと鹿威しの音が鳴り響く。

そんな格式高い一室には、仏頂面の私と、今日も化粧ノリが絶好調なアヤ叔母さん。そして見目麗しい青年がいる。

私は右隣に座っているアヤ叔母さんの顔を睨み付けたが、彼女は素知らぬ顔をしてホホホと笑う。  
「……本当にいいんですか？ この結婚、なしにした方が——」

私がポツリと呟いた言葉に、青年ではなくアヤ叔母さんが食ってかかった。

「何を馬鹿なことを言っているの！ こんな、凄くステキな男子が相手なのに！ 何が不満なの！」  
顔を紅潮させているアヤ叔母さんに、私は首を横に振る。

「不満なんてないよ」

「じゃあ何よ！ 私はね、死んだ姉さんからアンタのことをくれぐれもよろしくって頼まれているの。だから、こんなにいい条件の相手を手を連れてきたのに」

「それは知っているけど——」

「私の目に狂いはないわ！ この結婚はアンタを絶対に幸せにしてくれる！」

若々しくてモデルみたいなアヤ叔母<sup>おば</sup>さんは、私の亡き母の妹。

女手一つで化粧品会社を設立し、国内有名メーカーにまで成長させた人だ。仕事ができるし、人を見る目も肥<sup>こ</sup>えている。

そのアヤ叔母さんがここまで言い切るのだから、この青年はきつと素晴らしい人格者なのだろう。だからこそ、私は悩んでしまう。将来有望で、これから可愛い女の子たちとの出会いが待っているはずの彼を、アラサーの私が結婚相手にしてもよろしいものか……

私は君島<sup>きみしま</sup>咲良<sup>さら</sup>、二十九歳の独身。短大を卒業後、地元にある中小企業の窓口で受付業務をしている。

百人の女性がいれば埋<sup>う</sup>もれてしまう、ごくごく標準的な体形と顔の私。

特徴らしい特徴といえ、少し明るい茶色にしたポプカットの髪が、くせつ毛なことくらいだろうか。

色々なことに消極的で恐がりの私は、この年になっても恋愛<sup>こ</sup>ごに縁がない。だけどそのことに危機感<sup>き</sup>は持っていないかった。

一方、この状況を心配していたのは、私の養母となってくれているアヤ叔母さんだ。

私の父親は私が生まれる前に事故で亡くなっていて、母親も私が中学生の時に病死している。

行き場のない私を養子にし、これまで育て、守ってくれたのは、他でもないアヤ叔母さんだ。

その大恩人であるアヤ叔母さんが、先日、突然縁談<sup>えんだん</sup>を持ってきた。しかも、いわゆる政略結婚<sup>せいりやくけっこん</sup>だというから驚いた。

叔母さんの会社であるアヤ化粧品が火の車なのかと心配したが、危ないのは相手の方。

正面に座る青年のご実家——健康食品やサプリメントを製造販売<sup>せいぞうはんばい</sup>している大橋<sup>おほはし</sup>ヘルシーが倒産の危機とかで、アヤ化粧品との提携<sup>ていけい</sup>を望んでいるようだ。

私がこの縁談を断れば……彼の実家は倒産してしまうかもしれない。

アヤ叔母さんは常々、仕事では人情を切り捨てるのが信条だと言っている、彼の会社を助けるようとしていると聞いて、私は意外だと思った。

しかし、やっぱりそこはアヤ叔母さんである。アヤ叔母さんにも思惑<sup>しごく</sup>があったことだった。

アヤ化粧品は、サプリメント関連で大手の大橋ヘルシーと、共同商品を作りたいらしい。

両社にメリットがあると判断したからこそ、提携の話が出てきたというわけだ。それに加えてアヤ叔母さんの方から、提携したければ行き遅れそうな姪<sup>めい</sup>を引き取れと言出したのだとか。

アヤ叔母さんには恩があるし、役に立ちたい。そう考えていたものの、こういう困った状況になるとは夢にも思わなかった。

男の人と付き合ったこともない私が、恋をすつとばしていきなり結婚なんて、ハードルが高すぎる。

それに、お見合い相手の彼が可哀想で仕方がない。

この縁談は、間違いなく彼の意思とは別のところで動いているはずだ。家族や会社、社員を守るためにこの場にいる彼の心情を考えると、辛くて痛くて苦しい。彼の名前は、大橋春馬<sup>おおはしはるま</sup>。二十三歳なので、私と六つ年の差がある。背はスラリと高く、ほどよく筋肉が付いていてバランスがとれた体形をしている。優しい雰囲気、和風美青年といった感じだ。

容姿もいいが、経歴も凄い。

数年前までは有名大学に通いながら、実家が営<sup>いとな</sup>んでいる大橋ヘルシーを手伝っていた。大学を卒業した現在は、重役として働いているという。彼が、今回の提携<sup>ていけい</sup>をアヤ化粧品に持ちかけたとか。

それはアヤ化粧品のネームバリューや資金の調達力などが、大橋ヘルシーにとって大きなメリットになるためだ。

もちろん、アヤ化粧品にもメリットがある。

アヤ化粧品は近年、サプリメントに力を入れているという。何でも、大橋ヘルシーには特許を取得しているサプリメントの加工技術があるそう。それをアヤ化粧品でも取り入れたいらしく、必死なのだという。

両社にそれぞれ利点があるわけだが、大橋ヘルシーの方が必死なのだろう。その結果、大橋さんは人生を棒に振ることになる。もちろん、私も他人事ではないのだが……

本当にそれでいいのだろうか。

改めてそう思った私は、アヤ叔母<sup>おば</sup>さんに尋ねる。

「あのね、叔母さん。この結婚、本当にしていいのかな？」

「何を言っているの？ アンタこのまま独身<sup>ひとりご</sup>を貫<sup>ぬ</sup>くつもり？ 独身でいるぐらいなら春馬君と結婚した方がいいわ。春馬君はなかなかの好青年よ。私が言うんだから間違いないわ」

鼻息荒い叔母さんのため息をつき、私は大橋さんに視線を向けた。

「大橋さん」

「はい」

「大橋さんは会社を守るために、この縁談を受けようとしているんですよね？ でも、どう考えても私に大橋さんはもつたいなさすぎると思います」

アヤ叔母さんが息巻いて何かを叫<sup>こゝろ</sup>ぼうとしているのを押さえ、私は大橋さんを見つめた。

彼は何も言わず、私の話<sup>はなし</sup>に耳を傾<sup>かたむ</sup>けている。こちらを見つめ返すまっすぐな視線は射抜<sup>ぬ</sup>くように強くて、少しだけ怯<sup>ひ</sup>んでしまう。しかし、私は気を取り直して言葉が続けた。

「もし、会社の存続<sup>ぞんぞく</sup>だけを考えると私と結婚しようと思っっているのなら、やめた方がいいと思います。大橋さんには、もっとステキな人がいるはずだから」

そこまで言い切ったあと、大橋さんが聞き返す。

「それは……この結婚を受けたくないということですか？」

「政略結婚がイヤなだけです。それは大橋さんだって同じですよ？ もし、会社の倒産<sup>たふさ</sup>を防ぐためだけに私との結婚を考えているのなら、やめてください。叔母は、メリットがあると判断すれば提携を続けてくれると思います。こんな結婚をする必要はありません。大橋さんが、叔母を説得し

てみてください」

それだけ伝えて、私は腰を上げる。

アヤ叔母<sup>おば</sup>さんは、彼を優秀だと褒<sup>ほ</sup>めちぎっていた。それなら結婚という手段を使わなくても、彼がアヤ叔母<sup>おば</sup>さんを説得するのは可能<sup>た</sup>だろう。

本当はこれから出てくる料理が気になるが、長居は禁物だ。

ふすまに手をやり、退出しようとする私の背中に、大橋さんが言葉を投げかけてきた。

「咲良さんは、大橋ヘルシーを潰<sup>つぶ</sup>そうと考えているのですか？」

大橋さんの切羽詰<sup>せつ</sup>まった声を聞き、私は慌てて振り返った。

すると、美青年が口を真一文字に結び、縦<sup>すか</sup>のような目で私を見ているのが視界に入る。

彼の様子は、人懐っこい大型犬が悲しそうにクウンと鳴いて訴えているように見え、私は狼狽<sup>ろうばい</sup>した。

「そんな顔しないで！ 私は大橋ヘルシーを潰<sup>つぶ</sup>そうだなんて……」

「結婚しないということは、大橋ヘルシーが潰れるということと同じですよ」

「そうじゃなくて……大橋さんは優秀な人だと思えます。そうでなければ、結婚なんて話を叔母がするわけがありません。ですから、もつと違う形で提携を結ばばいいんじゃないかなって……」

何とかして考えを改めてもらおうとするのだが、大橋さんは未だに悲しそうな瞳で私を見つめている。

私はどうしようと思ひ、慌ててアヤ叔母さんに視線で助けを求めた。しかし、アヤ叔母さんは機

嫌を損<sup>そ</sup>ねてしまったようでツンとそっぽを向く。どうやら援護を期待するのは難しそうだ。

困り果てる私に、大橋さんが言い募<sup>も</sup>る。

「僕と結婚してください」

「でも……それはどうかと思うんです。大橋さん、貴方<sup>あなた</sup>の人生はこれからですよ？ こんな形で結婚して後悔<sup>くわい</sup>しませんか？ 私なんて美人でもないし、取り柄<sup>え</sup>もないアラサーだから……すぐ飽<sup>あ</sup>きて離婚したくなると思うんです」

「どうしてそんなふうに言うんですか？ 咲良さんは、とても可愛い人です」

そう言った大橋さんは、熱っぽい目で私を見据<sup>み</sup>えた。美形の男性にこうして見つめられるのは初めてで、どうしていいのかわからなくなってしまう。

顔はポツと熱くなるし、考えも纏<sup>まと</sup>まらない。ふいに、大橋さんが立ち上がったってこちらにやって来る。

固まったままの私の手を、大橋さんは温かくて大きな手のひらで掴<sup>つか</sup>んだ。

「お、大橋さん!？」

「僕は、咲良さんと恋愛したいです」

「え?」

「僕じゃご不満ですか？」

「そ、そうじゃないけど」

「そうじゃないけど、何ですか？ 僕が結婚後、浮気したり離婚を切り出したりすると思っ

す？」

グイッと顔を近づけられ、私は咄嗟に手を振り払い、彼の肩を掴んで押した。だけど、動揺して何も言えない。

これだから私はダメなんだ。臨機応変な対応が全くできず、これまでズルズル生きてきた。こういう場面こそ冷静さが必要なのに、すぐに挙動不審になってしまふ。

拒否の言葉を告げられないまま、私は大橋さんの熱っぽい視線を浴びる羽目になった。やがて、彼がボソリと呟く。

「どちらかというと、咲良さんが逃げ出したくなるかもしれませんよ」

「え？」

「いや、こちらの話です。それより僕と結婚してくれませんか？」

「あの、だから、その——」

「僕には、大橋ヘルシーを守る義務があります。そのためには手段を選びません」

その言葉は、私の心をひどく傷つけた。ようするに、大橋さんは私と結婚がしたいわけではない。会社を生き延びさせるためには、どんな相手とでも結婚すると言いたいのだろう。

大橋さんは、私と婚姻関係が築ければチャンスになる。大きな企業との提携が決まり、経営が安定するからだ。

アヤ叔母さんだつて、これから力を入れていきたいと思っていたサプリメントの技術やノウハウを大橋ヘルシーからもらうことができる。お互いにメリットがあるのは明白だ。

(だけど、私は？ 私にはメリットはないじゃない)

そう考えながら、私は大橋さんとアヤ叔母さんを交互に見る。そこで気が付いた。私にもメリットはあるかもしれない。

アヤ叔母さんには恩がある。いつか恩返しをしたいと思っていたのは事実だ。それが、この結婚によって実現できるかもしれない。

この結婚は愛情によるものではない。提携の条件として示されているものだ。だとしたら、私からだって条件を突き付けることは可能だろう。

気付いた瞬間、胸にあった不安がスーッと消えた。

この取り引きで分が悪いのは、間違いなく大橋さんの方だ。となれば、私が優位に立てるに違いない。

「アヤ叔母さん。この結婚は、双方にメリットがあるんだよね？」

「まあ、そうね。だけどね、咲良——」

何か言おうとするアヤ叔母さんの言葉を遮り、私は大橋さんとアヤ叔母さんに言葉を投げ付けた。「私からも条件があります。それに承諾してくれたら結婚します！」

勇気を振り絞った言葉に、大橋さんは何故か妖しげにクスッと笑う。

今までの彼のイメージが覆されるような笑みに、私は一瞬寒気がした。

自分の目を疑い、ゴシゴシと擦つてもう一度彼を見たが、席に戻った大橋さんの笑みは好青年風のものに戻っていた。さっきのは、私の気のせいだったのだろうか。

「では、咲良さんの結婚の条件。お聞きしてもよろしいですか？」

キレイな笑顔を私に向ける大橋さんに、またドキドキが止まらなくなる。

だが、ここが勝負だ。いつもは言いたいことの半分も言えない私だけど、これは一生を決める大事な舞台。

私は再び席に着き、傍に置いてあったウーロン茶のグラスに手を伸ばす。

そのとき、自分の指が小刻みに震えていることに気が付いた。

これは緊張のせいなのか、恐れの子なのか。たぶん、両方だろう。

私の手が震えていることに気が付いたのか。大橋さんはテーブル越しに手を伸ばし、私の両手首を掴んできた。そして、驚いて腰を上げた私の指に彼の唇が触れる。

私は一瞬何をされているのかわからず、大橋さんを見上げることしかできなかった。だが、すぐに状況を把握し、慌てて彼から離れた。

そんな私を見て、ほんわりと笑う大橋さん。

「可愛いですね、咲良さんは」

「なっ！」

「さあ、落ち着きましたか？」

しゃべり方、振る舞い、何をとつても、大橋さんは私より大人びている。六つも年下だなんてとても思えないほどだ。

それに対し、私ときたらどうだろう。三十歳目前のくせに、オタオタとして情けない。

深いため息をつきたいところだが、今はそれどころではなかった。

私は、「大丈夫です」と告げて大橋さんを見上げる。そして、こちらの要望を口にした。

「籍は入れません」

「え？」

目を丸くして呆気に取られている表情は、今までのように大人びたものではない。素の大橋さんを垣間見られた気がして嬉しい。

そう思いつつ、私は言葉を続ける。

「大橋さんと一緒に住むし、世間には結婚したと伝えますが——」

「あくまで形だけ……そう仰りたいのですね？ 咲良さん」

はい、と私は小さく頷いた。

今回の結婚は、企業同士の思惑があつて成立するもの。しかし刻一刻と情勢は変わっていく。いつか不要になるときが来るかもしれない。

そのときのためにも、しがらみはない方がいい。

ドラマや漫画などでは、政略結婚をした二人は仮面夫婦になることが多いように思う。

その仮面夫婦に、私たちもなる可能性は非常に高い。いや、なる。絶対に仮面夫婦になる気がする。

(だって大橋さん、格好いいからなあ……)

思わず『さん』付けで呼び、敬語で話しかけてしまうほど大人な彼は、お世辞抜きで格好いい。

さぞかしモテることだろう。

近い将来、私には見向きもなくなるはずだ。

「アヤ叔母さん。私はこの条件じゃなきゃ結婚しないですからね」

「あのね、咲良。そういうのは結婚って言わないわよ。同棲と変わりないじゃない」

「そ、そうかもしれないけれど……ずっとお世話になってきたアヤ叔母さんのお願ひなら聞きたいし、大橋ヘルシーの社員の皆さんを助けたいっていう気持ちもあるんだよ。だけど、私……結婚まではどうしても踏み切れなくて」

「咲良……」

困ったような表情を浮かべたアヤ叔母さんは、大橋さんを見て何か言いたげな顔をする。

大橋さんは小さくため息をつき、優しくはにかむ。

「わかりました。咲良さんが提示した条件をのみましょう」

大きく頷く大橋さんに、アヤ叔母さんは驚いて腰を上げた。

「ちよつと春馬君。それでいいの？」

「籍を入れないと提携の話はなくなってしまうですか？」

「えっと、それは……大丈夫だけど。いや、でもね」

アヤ叔母さんの歯切れが悪い。普段は竹を割ったような人なのに、この態度は変だ。

不審に思い問い詰めようとするが、それよりも早く大橋さんがきっぱりと言う。

「それなら咲良さんの意見を尊重しましょう。僕としては、アヤ化粧品が提携の話を蹴らなければ

それでいいのですから」

やっぱり私のことは二の次らしい。わかつてはいたけれど、改めて私なんてどうでもいいと言われたみたいで心が痛む。

籍を入れないでほしいとお願ひしてよかった。形ばかりの結婚なら、何とでもなるだろう。

ホツとした私に、大橋さんは言葉が続けた。

「形だけならいいと、咲良さんは考えている。それでいいですよね？」

「は、はい」

どこか含みのある言い方だが、大筋は合っている。私がコクリと頷くと、大橋さんにはっこりという意味深な笑みを浮かべた。

「では、結婚式を行いますよう」

「け……っこん、しき……ですか？」

「ええ」

とびつきの笑顔で答える大橋さんに思わず見入ってしまったが、慌てて頭を振った。

今、彼はほんでもないことを言っていないなかっただろうか。

結婚式といえば、親戚や友人、会社の上司などを呼んで、結婚するという事実を披露するものだ。偽りの結婚をしようとする私たちなら、しなくてもいいはずなのに。

「待ってください！ 形ばかりなのに、どうして結婚式をしなくちゃいけないんですか？」

私が声を上げて抗議しても、大橋さんは動じない。



「形ばかり、だからですよ」

「え？」

「僕たちが籍を入れないということは、大橋ヘルシーにとつて不安定な状況になるとおわかりいただけますか？」

「提携をうやむやにされる危険性があると仰りたいのですか？」

その通りです、と大橋さんは清々しい笑顔で頷く。

「今回のことは籍を入れて雁字搦めにするからこそ、意味があるのです。いわば、入籍すること自体が、契約書みたいなものですから」

彼が言わんとすることは理解できる。だが、それと結婚式はどう関係があるのだろうか。

首を捻る私に、大橋さんは目を細めて言う。

「入籍しないならば、担保が必要になります」

「担保、ですか」

「ええ。一緒に住んでいるだけでは、先ほど君島社長が言われたように同棲と一緒に。それでは世間の目は誤魔化せません」

「た、確かに……」

「そこで結婚式が必要になってくるのです。盛大にお披露目すれば……僕たちが夫婦になることを誰も疑わないでしょう？」

まさにその通りだが、何だか釈然としない。

籍を入れたら後々大変になりそうだし、かといって籍を入れず結婚式をすとしても、その準備などで苦労をしそうだ。

どちらからも逃げ出したいが、大橋さんはそれを許してくれそうにもない。それに、私がここで結婚自体をやめると言ったら、アヤ叔母さんに迷惑がかかる。

迷う私に、大橋さんがにこやかに声をかけてきた。

「僕としてはどちらでも大丈夫ですよ。籍を入れて結婚するか、それとも籍を入れず結婚式だけを執り行うか。咲良さんにお任せいたします」

「……どちらもやめておこうという選択肢は？」

「ないです。一度のんだ条件を覆すというのは、ビジネスにおいても、大人の対応としてもよくないですよね」

グツと言葉に詰まる私を見て、大橋さんだけではなくアヤ叔母さんも楽しげに笑う。

彼らの笑みは友好的なものではなく、私は自分が四面楚歌の状況だと悟った。

昔から、アヤ叔母さんには敵わなかった。その上、今は大橋さんという得体の知れぬ強者までもが私の前に立ち塞がっている。

口が達者ではない私の扱いなど、二人にしてみたら楽勝だろう。

何も言えなくなつた私に、大橋さんが畳みかける。

「咲良さん。どうしますか？ 今すぐ婚姻届を書いて区役所に提出しに行きますか？ それとも結

婚式場を探しに行きますか？」

キレイな笑顔だと思っていた大橋さんの顔が、今は、とてつもなく怖い。逃げられない状況に追い込まれた私には、顔くという選択肢しか残されていなかった。

「……式場はお任せいたします」

一番苦難の道を選びましたと気が付くのは、だいぶ後だった。

\* \* \*

あの奇妙な見合いから十日間が経った。

『籍は入れないけれど、結婚式はする』

あれから何度も、この軽はずみな決定を取り消そうとアヤ叔母さんに直談判をしたのだが、そのたびに蹴散らされてしまっている。

『咲良が決めたことでしょ？ ビジネスとして動き出したものは止められないから、諦めて結婚式しなさい。いいじゃない、春馬君はお買い得よ。絶対に咲良も気に入るから』

ニヤニヤ顔でそう言われてしまったのだ。確かにあの見合いで、彼が一筋縄ではいかない人物だとわかった。アヤ叔母さん好みの男性だろうが、だからといって、私が彼を好きになるかどうかは別問題だ。

この十日間、何とか破談にしなくてはと悶々と考え込んでいたが、打開策は浮かんでこない。今日も仕事を終えた私は、悩みつつアヤ叔母さんと住むマンションに帰ってきた。

すると、問題の彼が、マンションのリビングのソファでくつろいでいる。

「おかえり、咲良」

「ど、どうして!? なんで大橋さんがここにいるの?」

ここはアヤ叔母さん名義のマンションのはず。

しかも叔母さんの姿は見当たらない。何故叔母さんがいないこの部屋に、彼がいるのか。

突っ込みたいところがたくさんある状況だが、まず指摘すべき点がある。

いつから大橋さんは、私の名前を呼び捨てにし始めたのか。あの日に会った好青年はどこに行ってしまったのかと言いたくなるほど、今日の大橋さんは威圧的な態度だ。

「ほら、突っ立っていないで座れよ」

「きゃあ!」

腕を強く引つ張られ、私は彼の腕の中に収まってしまった。

慌てて逃げようとするのだが、大橋さんに強く抱き締められて動けない。

彼は腕の中にいる私に顔を近づけ、クンクンと鼻を鳴らした。

「咲良、いい香りがする」

「な、何をしていますか!?!」

今日一日仕事をして、汗をかいているはず。臭がないでほしい。

(違う、そうじゃなくて……えっと、とにかくここから逃げ出さなくちゃ)

私は必死にもがいて大橋さんの腕から抜け出ようとする。でも、抜け出るところかますます強く

拘束こうそくされてしまう。

あの衝撃的な政略結婚を打診してきた日の大橋さんは、紳士しんしてき的で六つも年下だと思えないほどしつかりした男性だった。

だが、今の太橋さんはあのとときの彼ではない。紳士的な振る舞いが、俺様な態度に変わっている。戸惑う私に構わず、太橋さんがマイペースに口を開く。

「今日も一日お疲れ。メシは食べた？」

「えっと、まだですけど……それより」

彼がこのマンションに居ること、そして初めて会ったときは別人みたいになってしまったこと——ご飯よりお風呂より、これらの説明が最優先だ。

しかし、太橋さんは別の選択肢を提示してきた。

「メシより俺に抱かれない？」

「は!？」

「それじゃあベッドに行こうか」

「ちよっと待って！ きゃあ!!」

太橋さんは立ち上がり、私の部屋へ迷わずに向かっていく。

初めてこのマンションを訪れたはずの太橋さんが、何故私の部屋場所を知っているのだろう。

私は混乱しつつ、ドアノブに手を伸ばそうとする太橋さんを必死に止めた。同時に、先ほどの疑問について尋ねる。

「どうやってこの家に入ってきたんですか!？」

やっと動きを止めた太橋さんは、きょとんとした表情を浮かべたあと、プツと噴き出した。

「今、その質問をするわけ？ これから自分が食べられるっていう危機感はないの？」

「いや、えっと、うん、そうだけど」

しどろもどろな返事をして、目を白黒させる私がよくおかしかったのだろう。太橋さんは私を床へ降ろしたあと、お腹を抱えて笑い出した。

いつまでも笑っている彼を、私は何とも言えぬ気持ちで見つめるしかできない。

スカートの裾すそをギョツと握りしめていたら、ふいに、チラリと色っぽい視線を送られる。

その瞬間ドキンと胸が高鳴り、そのあとは自分の胸の音しか聞こえなくなった。

恋愛偏差値が底辺な私としては、彼のような見目麗めいれいしい人にこんなことをされると、どう対処していいものか考えあぐねてしまう。

困惑している私に、太橋さんは艶つやっぽく口角を上げた。その笑みは爽さわやかさとはかけ離れていて、策士と呼ぶにふさわしい表情だ。

「色々聞きたいって顔しているね」

「そ、それは！ だっってどうして、こんな」

「聞きたいよね？」

妖あやしげに笑う太橋さんにつられるように、私はコクコクと大きく頷うなずく。

だが、私の耳元で囁ささやかれた太橋さんの言葉は、期待していた答えからはほど遠いものだった。

「ベッドの中でなら、教えてあげてもいいよ？」  
「っ！」

言葉をなくし、棒立ち状態になった私を、大橋さんは再び抱き上げた。私はふわりと宙に浮いたあとで、貞操の危機が迫っていると気が付き慌てる。

「待って！ ベッドじゃなくたってお話はできます」

「できるけど、裸になって話した方がオープンに何でも話せるだろう？」

「そ、それは恋人同士の話じゃないですか？」

「俺たちは婚約者同士だけど？ ここはお互いにすべてをさらけ出して話をする必要があると思わない？」

彼はキレイな目をスツと細め、熱い視線を私に注ぎ、右手を掴んだ。

その視線に気が付いた直後、顔どころか、全身が熱くなっていくのがわかった。

もしかしたら、大きく高鳴っている鼓動が大橋さんに聞こえてしまっているかもしれない。

しかし、ここで流されるわけにはいかなかった。

（自分の身は自分で守る。これ、お一人様の鉄則！）

私は勢いに任せ、思いつき手を振り上げた。それを素早く振り下ろせばバチンと小気味よい音がして、手がジンジンと痛んだ。

「……女に殴られたのは初めてかもしれない」

「ご、ごめんなさい！ どうしよう！」

攻撃するつもりではあったけれど、実際にやってみるとすぐ後悔に襲われた。

大橋さんの右頬には、真っ赤な手形がくつきりとついている。冷静になった私が慌てて彼の腕の中で謝ると、彼は困ったように眉を下げた。

そしてギュッと私を抱き締め、再びリビングに戻る。

彼はソファアの上に私を降ろし、赤くなっている頬を擦った。

「大橋さん、すぐ冷やしましょう！」

私はソファアを慌てて降り、冷蔵庫から保冷剤を取り出した。それをタオルで巻き、大橋さんの腫れた頬に押し当てる。

「これで少しはよくなるといいのだけど……ごめんなさい」

「何で咲良が謝るの？ 悪いのは俺だよ」

「そ、そうだけど」

真っ赤に腫れた頬を見ると、どちらが悪いのかわからなくなってしまう。

オドオドしている私を見て、大橋さんは深くため息をつく。

「咲良らしいというか……」

「え？」

「いや、何でもない。夕ご飯を食べながら咲良の疑問に一つずつ答えていくよ」

そう言って穏やかに笑う様子はお見合いのときと同じで、私は心から安堵した。

彼は私をリビングに残し、ダイニングキッチンの方へ歩いて行く。

その後ろ姿を眺めながら、私は何度もため息をついた。わけがわからない状況にドッと疲れが出てソファーに身体を沈めっていると、キッチンからいい香りがしてくる。

美味しそうな香りにつられてダイニングへ行けば、大橋さんがお皿にカレーを盛っているところだった。

「今日はカレーにしてみた。俺のカレーはうまいよ。インド料理屋でバイトしていた経験があるからさ。本格的だぞ」

さあ召し上がれ、とダイニングテーブルに置かれたカレーは、凄く美味しそうだ。

「スパイス配合もかなり計算して作った」と大橋さんは自信満々で力説する。

その表情は少年っぽさが抜け切っていないくて、とても可愛い。

私に迫ってきたときの俺様な態度、お見合いのときのデキる大人の表情。色々な顔を持つ大橋さんから、何だか目が離せない。彼がどうして我が家のキッチンで料理をしていたのか疑問ではあったが、まあいいかという気分になってしまった。

「ほら。温かいうちに食べよ」

「あ、はい」

大橋さんにすすめられた私は、手を洗ってテーブルにつく。そしてスプーンを手に取り、カレーを口に運んだ。その途端、思わず叫んでしまう。

「美味しい!!」

スパイシーな香り、コクがある。ご飯を何杯も食べられそうだった。

美味しい、と連呼する私に、大橋さんはまんざらでもなさそうだ。

「やっぱり胃袋から掴むのが鉄則だろう?」

「え?」

テーブルに肘をついて私を見つめる大橋さんは、嬉しそうにニコニコと笑っている。

胃袋から掴むとは一体どういうことなのだろうか。

はて、と首を傾げる私に、大橋さんは大声で笑った。

「女の心を掴みたければ、胃袋も掴まないと」

「それって、女子が言う台詞じゃないですか?」

私の疑問に、大橋さんはきりつとした顔をして口を開く。

「どっちだっていいだろう? 咲良の心を掴みたいっていう気持ちは変わらないんだし」

「っ!」

どこまでが本気なのだろう。これほど真剣な表情で言われたら、真に受けてしまいそうになる。

でも大橋さんが、こんなふう私へ必死にゴマをするのには理由がある。

私がへそを曲げて、「結婚なんてしない!」と言い出せば、何もかもが白紙に戻るからだ。

(何か複雑だなあ……)

誰かが振り返ってしまうほど格好いい男の子から甘い言葉をかけられれば、誰だってドキドキしてしまうだろう。

正直に言うが、悪い気はしない。

だけど、彼の行動には「会社のため」という理由がある。

それがわかっていているからこそ素直に喜べないし、どんな言葉にも裏があるのではないかと疑ってしまうのだ。

大橋さんは戸惑う私の顔を覗き込み、ジッと見つめた。

彼の強いまなざしに、悪いことなどしていないのに何故か罪悪感に苛まれる。

大橋さんは急に移動して私の背後に立った。そして、スプーンを持って私の手をギュッと握りしめる。

「大橋さん？」

「カレー食いながらでいいから、咲良の疑問に答えていくよ」

笑ってそう言う彼に、私は慌てて叫ぶ。

「こ、これじゃ食べられませんっ！」

「悪い、悪い」

謝りながらも、大橋さんは私の手を握りっぱなしだ。

ちっとも悪びれない彼に、私は顔を真っ赤にさせた。

「質問しますから、この手を解いてくれませんか？」

スプーンを持った私の手は、大橋さんの大きな手に包み込まれている。

こうして手からぬくもりが伝わってくると、ドキドキが止まらなくなってしまう。

しかも背後から抱き締められるような体勢なので、先ほどから胸が壊れそうだ。

こんなふうには手を握られるなんて、これまでされたことがない。

免疫がない私は、これだけで卒倒しそうだ。だけど、大橋さんは慣れきっているに違いない。それがわかっていているから余計に悔しい。

私は、もう一度彼に手を離すように言うため振り返る。すると、思ったより近くに大橋さんの顔があつて驚いてしまった。

「キヤッ！」

「そんなに驚かなくていいだろ？ そのうち俺たち結婚するんだから」

「結婚はしません！」

「世間にお披露目はするから一緒だよ。結婚式をすれば、春馬君のお嫁さんって呼ばれるようになるんだ。それなのに、今からこんな調子でどうするの？」

「うっ！」

確かに、大橋さんの言う通りだ。籍を入れない約束にはなっているが、結婚式をして世間にお披露目するというのは、彼と夫婦になると宣言するようなもの。

やっぱり、うかつだったかもしれない。後悔先に立たずとはよく言ったものだ。

困り果てて眉を寄せる私に、大橋さんは追い打ちをかけてくる。

「それに、結婚式じゃ人前でキスしなくちゃいけないのに。これじゃあ先が思いやられるな」

思わず大橋さんの形のいい唇を見つめてしまった。あの薄い唇が、私の唇に接近するなんて……

想像したら、一気に全身がボンと熱くなった。

そのことを大橋さんに悟られたら、恥ずかしい。ゆっくり彼から離れようとするのだけど、大橋さんはそれを許してはくれなかった。

「どうしたの？ 顔が真っ赤だよ」

「き、気のせいですよ。きつと」

「俺とキスするのを想像しただけで赤くなるんだ。可愛いね、咲良は」

「なっ!!」

本当のことだから反論できない。だが、無言でいるのは肯定しているのと同じだ。

何か言わなくてはと慌てて言い訳を考えたものの、浮かんでこなかった。我ながら、全く残念な頭だ。

私の様子を見て、大橋さんはいたく嬉しそうにしている。それが悔しくて頬を膨らませたら、再びギュッと抱き締められた。

「ちよ、ちよつと。大橋さん!？」

「咲良はいい香りがするね」

「いや、そうじゃなくて。離れてください」

「イヤ」

「イヤ!？」

とにかくここから離れなければ。スプーンを置いて彼の腕の中でもがく私に、大橋さんは魅惑的

な声で囁いた。

「結婚式。出席者と牧師さんの前で、キスするからね」

「っ!」

確かに、教会での式なら公衆の面前でキスをして、誰も咎めないだろう。それどころかカメラを持った友人たちに「もつと長く」と言われてしまうかもしれない。

実際、何度か友人の結婚式に出席したとき、誓いのキスは盛り上がっていた。

私も友人のキスシーンをばっちり写真に収めて、後日現像して渡したことがある。

自分の手元だけでなく、出席者にもずつとキス写真が残るのだ。

これはマズイ。何としても阻止しなければ。

「えつと大橋さん。式をやるにしても、教会式じゃなくなっちゃっていいんじゃないでしょうか？ ほら、

神前式なんかいいと思いますよ。厳かですし」

「まあね。咲良は白無垢もとても似合うと思うけど、純白のウェディングドレス姿が見たいから教会式で決定」

「何故ですか？ 式を挙げるだけでいいんでしょう？ それならどんな式でもいいと思います」

もがきながら抗議をする私に、大橋さんは妖しく笑った。

「ねえ、咲良」

「な、何ですか！ 絶対に教会式なんてやりませんから」

「アンタにそれを言う資格はないんだよ？」

大橋さんの凄みがある声に、私の身体がビクンと跳ねた。その反応さえも、彼は楽しくて仕方ないようだ。

彼は私の耳元でクスクスと笑いつつ、「思い出して」と呟いた。

「咲良が言ったんだよ？」

「え……？」

「お任せします、つてね」

それを聞き、口をぽっかりと開けて固まる私を、大橋さんは再びギョツと抱き締める。恥ずかしくてどうにかなくなってしまいたいそうだが、今はそれどころではない。

あのお見合いの日。私は確かに「式場はお任せします」と言ってしまった。一度口にした言葉は、もう取り返しがつかない。

がっくりと項垂れる私の頭をグリグリと撫で、大橋さんは鼻歌を口ずさむ。

「咲良は本当に可愛い」

「年上のくせに危機管理もできないバカだと思っっていますよね？ 自分でもわかっているから、言わないでください」

拗ねてそっぽを向いていると、大橋さんに強引に立たされた。

私が先ほどまで座っていた椅子に彼は座り、突然、私の腰を掴む。

大橋さんは、慌てる私を無理やり膝の上に、後ろ向きで座らせた。腰に回された腕、お尻から伝わる筋肉質な太もも。それらは、私をパニックにさせるには充分だった。

「キヤア！」

「ほら動かないの。落ちちゃうぞー！」

「それなら降ろしてください」

「ダメ。ずっと咲良とくっついていたい」

私の背中に鼻の頭をすり寄せ、また私の香りを嗅ぐ大橋さん。

「やだ。匂い嗅がないで！ 変態！」

「変態で結構。何と呼ばれようと離してやらない」

ギョツと私の腰を抱き締め、より密着させる彼だが、私だってやられっぱなしではられない。強引に膝の上から降りようとすると、大橋さんは急に私の腰を抱く腕を緩めた。

「降ろしてもいいけど。そうしたら、咲良が疑問に思っていることを話さないよ」

「な、何て卑怯な!!」

「卑怯だなんて人聞きが悪い。こういうのは交渉戦術って言うんだぞ？」

この体勢でいなければ話をしないなんて、脅しと一緒だ。

疑問はたくさんあるけれど、もういい。それなら聞かない。

そう決断した私は、すぐに大橋さんの膝の上から降りようとした。その途端、彼が口を開く。

「ちゃんと俺の膝に座ったまま話が聞いたら、式のことを考えてもいいよ」

その言葉に一瞬動きを止めた私は振り向き、大橋さんの顔を確認する。「本当に本当？」と何度も聞いたところ、彼は大きく頷いた。これは譲歩する必要があるがそうだ。



私は大橋さんの膝の上に渋々座り直した。

「座りましたよ。これで私の疑問に答えてくれるんですよ？」

「ああ。よくできたな、咲良」

子供をあやすように、私の背中をさする大きな手。だけど、私は安心するどころか、ドキドキが止まらなくなってしまうった。

とにかくこの状況は心臓に悪い。早く話を終わらせて、ここから脱出しなくては。

私はコホンと小さく咳払いをしたあと、彼に声をかけた。

「ほら、早く答えてください」

「いいよ」

余裕綽々な声<sup>ホレウシヤクシヤク</sup>がまた憎らしい。私は唇を尖らせて後ろを向いた。

「まずは、どうして大橋さんがここにいるんですか？」

「どうしてって、俺は今日からここに住むから」

「え？」

聞き間違いだろうか。呆気<sup>あおけ</sup>にとられている私を見て、大橋さんはポケットから何かを出した。

「これ……」

それを見た私は呆然と呟く。大橋さんの手のひらにあるものは鍵<sup>かぎ</sup>だった。

しかも、見覚えがある。アヤ叔母<sup>おば</sup>さんと私が住むこの部屋の鍵だ。

どうして彼がこの鍵を手<sup>て</sup>にしているのだろう、と考えたが、すぐにわかった。

「アヤ叔母さんが、大橋さんに渡したんですか？」

「そう。渡されたっていうか、もらった」

「もらった!?」

私は目眩<sup>めまよ</sup>でクラクラする頭を支えながら、こめかみを押す。

これじゃあ出入り自由じゃない、とポツリと呟くと、大橋さんは肩を揺らした。

「出入り自由なんてもんじゃないよ。だって、俺は今日からここに住むわけだし。咲良の隣の部屋を俺の部屋にしていって社長が言っていた」

「アヤ叔母さんが帰ってきたら、抗議してやる」

怒りが込み上げてきたが、今、ここには怒りをぶつけるべき相手がいない。

静かに闘志を燃やす私に、大橋さんはニヤリと意味深に笑う。

「社長は帰ってこないよ」

「え？」

「このマンション。咲良と俺にあげるって」

「は？」

言葉<sup>ことば</sup>を失う私に構わず、大橋さんはリビングのあちこちを指さした。

「ほら、ちよっと殺風景になっっていない？」

「確かに！」

見回したところ、アヤ叔母さんの愛用のラグチェアがない。それに、スチールハンガーにかけて

あつた帽子もなかった。

そういえば、玄関もいつもより殺風景だった気がする。

これは、アヤ叔母さんは本気で帰ってこないつもりだ。愕然としている私の耳元で、大橋さんが色っぽく囁く。

「二人つきりだな」

「っ！」

動揺のあまりビクツと飛び上がる私に、大橋さんはフツツと笑い声を漏らした。

「ここが咲良と俺の愛の巣ってヤツかな」

「あ、あ、愛の巣って……」

思わずのけぞってしまった私を、大橋さんが慌てて抱き留める。

そして今度は私を横抱きになると、彼は満足そうに頷いた。

「結婚したはずの男女が別居していたら、世間はどう思う？」

「うっ」

「それに咲良は、同居だけは許してくれていなかった？」

「それは、だって……」

先日は、世間を欺くために、同居だけすればいいだろうと思っていた。

でも、深く考えていなかったことは否めない。

そもそも、アヤ叔母さんも一緒に住むと思ひ込んでいたから、大橋さんと同居しても何とかなる

と判断したのだ。

だが、よくよく考えれば、あのアヤ叔母さんが一緒に住んでくれるとは思えない。

『いやよ。姑が新婚家庭を邪魔してるなんて言われたくないもの』

とか言って、拒否しそう。

こうやって冷静になればわかるのに、あの時の私は目先の問題で手一杯だった。今さら悔やんでも悔やみきれない。

自分のお気楽さ、危機回避能力の低さに頭が痛くなる。

「同居でも同棲でもない、新婚家庭だからな。そこんとこ間違えるなよ？」

私にそう言い聞かせる大橋さん。しかし私には、答える気力がなかった。

神様。仏様。私はどうやら悪魔に魅入られてしまったようです。

がっくりと項垂れる私を見て、悪魔が高笑いをした。

ジトツと睨んだが、大橋さんは気にもしていない様子だ。

私は一つ大きいため息をついて、話を切り替えることにした。

「とりあえず、その問題は置いておきます」

「ん？ 置いておくん。余裕だね、咲良」

「余裕なんてありません。ただ、これについてはアヤ叔母さんにも抗議しなくちゃいけないからです！」

むきになって反論する私を、大橋さんはやんわりと笑ってかわす。

そういう態度は大人な雰囲気、私より年下とはとても思えない。

これは本当にマズイ。危機管理能力を上げなければ、大橋さんの思うようにされてしまう。不安を感じながらも、私は別の疑問を投げることにした。

「あと、大橋さん」

「あ、ちよっと待って。咲良」

「え？」

質問しようとした矢先、大橋さんに止められてしまう。いったい何なんだろう。

「それ、やめてくれないか？ 他人行儀でイヤだ」

「何を？」

「大橋さんって呼び方。春馬って呼んでよ。咲良の方が年上だから、呼び捨てでね」

「それを言うなら、大橋さんが私を咲良って呼び捨てにするのは、どうかと思います」

「じゃあ、咲良さんって呼べばいい？」

まっすぐな瞳でこちらを見つめる大橋さんに、戸惑ってしまう。

「べ、別に、何でもいいですけど」

「それなら呼び捨てのままにする。ずっとこう呼びたいって思っていたから」

「え？」

「いや、こつちの話。それより、これから春馬って呼べよ」

「無理です」

即座に拒否した私に、大橋さんは口元を緩ませた。その笑みは美しいのに不穏で、悪魔と称するのにふさわしい空気がある。

ゆっくりと私の肩に触れた彼の手は、そのまま脇腹を通り、腰にたどりついた。

その動きはどこか官能的で、身体がゾクゾクと震えてしまう。

「俺の手は、咲良を欲している」

「……？」

「このまま俺に抱かれる？ 咲良」

冗談でしょう、と笑い飛ばそうとしたが、間近に迫る大橋さんの目は真剣そのものだった。

腰で止まっていた彼の手が、ヒップを撫でるように動き出す。

驚いて目を丸くする私に、大橋さんはニッコリと満面の笑みを浮かべた。

「このまま抱かれるのがいいか、それとも俺を春馬って呼ぶか。一つに一つだ。さあ、どうする？」

「ど、どうするって」

究極の選択を突きつけられ、キャパシティーが少ない私の脳はパンク寸前だ。

アワアワと慌てふためく私に、大橋さんは顔を近づけた。

「ち、近いですよ、大橋さん」

「あ、まだ大橋さんって言う。そうか、咲良は俺に抱かれないんだ？ いいよ、今から抱こう。どうする？ このままダイニングテーブルの上ですか？ それとも寝室に行く？」

「どっちも遠慮申し上げます！」

「じゃあ名前で呼びなよ。そうしないと貞操の危機だよ？ 君島咲良さん」

そう囁かれた瞬間、背中にゾクリと甘美な刺激が走った。腰にくる声っていうのは、こういう声を言うのかもしれない。

大橋さんは顔もスタイルもよくて、並の女の子ならすぐに陥落してしまうだろう。その上、声までいいとなれば向かうところ敵なしである。

熱くなる頬を隠すこともできず、私はただ呆然とするだけだ。

そんな私の顔をチョンチョンと指で突きながら、大橋さんは笑う。

「ほら、観念して俺の名前を呼んで？」

「……」

「ほら、咲良」

大橋さんに促されるまま、私はそっと呟いた。

「……春馬君」

「んー、呼び捨てがいいんだけど。でも、君付けも咲良らしくていいな」

目尻を下げて笑う大橋さん——春馬君は、とても嬉しそうだ。

こんなことで大喜ぶする春馬君を見て、私は一瞬状況を忘れ、思わず笑ってしまった。

「ふふっ。春馬君は大人っぽいのか、子供っぽいのか。わからないですね」

「それが俺の魅力の一つじゃない？ すぐに咲良だつて虜になるよ」

「そうやって、色んな女の子と付き合ってきたんじゃないんですか？」

カチンときて言い返せば、その反応さえも嬉しいと春馬君は目尻に皺を寄せてほほ笑む。

「ヤキモチ焼いてくれるなんて嬉しい」

「ヤキモチじゃないです！ それよりこの手を、早くどけてください」

私のお尻を触る手をペチンと叩く。すると、彼は大げさに騒いだが知らぬ振りだ。

ツンとそっぽを向く私を見て、春馬君は声を上げて笑う。

恥ずかしくなった私は、慌てて口を開く。

「そ、それより！ 質問の続き」

「ん？ まだあるの？」

「あります！ いっぱいありますよ」

自分の太ももをバンバンと叩きながら、私は春馬君に訴えた。

「お見合いのときと全然雰囲気違います！」

「そりゃそうだろう。初対面の人に会うとき、大体は猫を被らない？」

「そ、そうかもしれない……けど」

春馬君の言う通りなのかもしれない。初対面の相手と会うときは、多少なりともよく見せたいと思うのが人情である。

それに、春馬君は会社のために政略結婚をどうしても遂行させたいので、なおさら礼儀正しい大人の男を演じるものだろう。

しかし、こちらとしては詐欺にあつたようで納得がいかない。複雑な思いでいたら、春馬君がし

れつと言う。

「これも交渉戦術。それにしても、そんなにビックリした？ 納得がいかないって顔している」  
「だって別人なんだから。詐欺だと思えます」

「詐欺か。だけど、今の俺は偽りもない大橋春馬だ。心配しなくていい」  
「どちらかというところ、お見合いの時の春馬君の方がよかったかも」

真顔で呟けば、「そんなこと言うなよ」と春馬君は私の頭をグリグリと撫でる。

そのせいで髪の毛がグシャグシャになったら、春馬君はそれを見て大笑い。全く失礼極まりない。唇を尖らせて抗議をする私を、彼はとても愛おしそうに目を細めて見つめた。

(えっ、どうして?)

春馬君とは、あのお見合いで初めて会ったはずだ。それもこの結婚は、会社のための政略結婚。それなのに、何故ここまで、私を優しい瞳で見つめることができるのだろうか。

もちろん私にゴマをする必要があるからだということとはわかる。だけど、本当にそれだけなのだろうか。

強引な態度や行動で私を追い込むくせに、どこかに逃げ道を用意して、そこに導いてくれる春馬君。

そういえば、彼の言葉の端々に気になるところがあった。

前々から私を知っていたかのように言うときがあるのだ。春馬君と顔を合わせたのは、これで二回目のはずなのに。

「あの、春馬君」

「ん？」

「私たちって、あのお見合いで初めて顔を合わせたんですよね？」

私の釣書を見たり、調査をしたりしていた可能性は高いが、それだけではなさそうな気がする。もし、面識があるのなら、いつだろう。私は彼と話したことがあるのか。

ドキドキする胸をギュッと押さえながら、春馬君の顔を見つめる。

だが、彼は私の質問に質問で返してきた。

「咲良はどう思う？」

「私は思い出せないんだけど、どこかで会ったことがあるんじゃないかなあ、と思います。だって、春馬君の言葉に、何か以前に会ったことがあるみたいな含みを感じるときがありますし」

静かに私の話の耳を傾けていた春馬君は、突然私を抱いたまま立ち上がった。

不安定な身体を守るため、私は咄嗟に春馬君にしがみついてしまう。

「いいね、そうやって俺に縋っているよ」

「い、いやです。突然立ち上がるからびっくりしたただけのもの！」

慌てて手を解こうとしたが、それを拒むように彼は私を力強く抱き締めた。

「さあて、俺が咲良を知っていたかどうか。教えてほしいんだろ？」

「そ、それはもちろん」

過去に春馬君と出会っていたというなら、その出来事を思い出したい。

面識があるのに覚えていない上、思い出そうともしないなんて、あまりにも失礼だろう。コクコクと頷く私に、春馬君は意地悪な笑みを浮かべた。

「続きはベッドの上で、な」

## 第二章

春馬君がマンションに押しつけてきた翌朝。私と彼はリビングで朝食をとっていた。

「ねえ、咲良。俺のほっぺ、赤く腫れていない？」

「……」

「それでも俺、御曹司<sup>おんざうし</sup>ってやつなんだけど」

「……」

ここは無言を貫く。それしかない。

チラリと春馬君の顔を見たが、大げさにするほどでもなかった。

大丈夫、誰かに頬を叩かれたとは気付かれないはず。

黙々とご飯を食べる私に、春馬君は恨みがましい様子で呟く。

「何も、両頬を叩かなくてもいいのに」

その言葉に、私はつい突っ込んでしまった。

「春馬君が全部悪いです」

「俺は悪くないと思うけど？」

「絶対に春馬君が悪いです。すぐに答えてくれていたら、あんなことしなかったのに。一言目にはすぐ、べ、べ、ベッドについて言うし」

「咲良を抱きたいんだから仕方ないだろう。俺は本能のまま動くから」

温かいお茶を飲みながら、悪びれもせず言い切る春馬君に呆れ返ってしまう。

昨夜、彼に再び寝室へ連れ込まれそうになった私は、彼の左頬を思いつき叩いて阻止したのだ。

春馬君だつて自分が悪いとわかっているくせに、こうやってチクチクと私の良心に訴えかけている。

何だか釈然としないし、昨夜からずっとふてくされているのは私だけだなんて悔しい。

春馬君は本当に意地悪だ。

それなのに、彼の朝食も用意した私は絶対にお人よしだと思う。

お味噌汁<sup>みそじゆ</sup>を飲みながら、私はふと窓の外を見つめる。

春馬君が言っていた通り、昨夜アヤ叔母<sup>おば</sup>さんはマンションに帰ってこなかった。

本気でこを私と春馬君の生活スペースにするつもりなのだろう。

(あとで叔母さんに電話しなきゃ)

あれこれと抗議して、考え直してもらわなくてはならない。

しかし、電話したからといってこの状況を回避できるのかは、別の話なのだろうけど。

私は視線を戻し、正面に座って美味しそうにお味噌汁を飲む春馬君を見つめる。

そういう表情は無邪気なものになあと思っていると、彼は箸を置いた。

「咲良。結婚式の日取りだけど、来月の第二土曜日だから」

「え？ ずいぶん急ですよね？」

カレンダーを確認したところ、その日は大安のようだ。

式場を押さえるのも至難の業だっただろう。

アヤ化粧品と大橋ヘルシーというネームバリューを使って、無理やりねじ込んだのかもしれない。そう思い眉をひそめていたら、春馬君が首を横に振る。

「急でもないよ。だって提携の話が持ち上がっていた時点ですぐに予約していたし。もう一年も前にね」

「え!？」

驚きのあまり、私はご飯茶碗を落としてしまう。幸い中身はちょうど空になったばかりで、お茶碗も割れなかった。

箸だけを持ったまま動かない私に、春馬君はフフフと楽しげに笑う。

「社長には、だいぶ前から話を持ちかけていたからね。その頃にはすでに、いくつか式場を押さえていた」

「押さえていたって……」

「社長が俺をお気に召さなかったら計画はパーになるから、気が気じゃなかったんだけどね。一番

困ったのは咲良のことかな」

「え？ 私??」

「そう。咲良の好みがわからなかったからさ。でも、見合いの席で咲良が俺に式場を任せると言ってくれて助かったよ。凄く悩んだけど、咲良が一番好きそうな式場にした」

ほら、と目の前にパンフレットを差し出されて目を見開いた。

この式場は、県で一番収容人数が多く、立派な式ができると評判のところだ。

パラパラとめくっていくと、牧師の前で誓いのキスをしようとしている新郎新婦の写真があった。(これを、私と春馬君でするっていうの?)

慌ててパンフレットを閉じる私を見て、春馬君は目を輝かせた。

「どう? ステキな結婚式場だろう?」

「う、うん」

確かにステキではある。友人の結婚式で一度訪れたことがあるが、おとぎ話の中に紛れ込んでしまったかと錯覚するほどに、幻想的な風景の式場だった。

一緒に出席した友人たちも感嘆のため息を零して、「こんな式場で結婚式がしたい」なんて言っていた。

しかし、まさか恋愛に縁がなかった自分が、この式場で結婚式を行うとは夢にも思わなかった。ただどそれが今、現実が起ころうとしている。人生どこでどう転ぶかはわからない。

昨日、「教会式はしたくない」と主張したことも忘れ、私は考え込む。

(本当に私、結婚式をするのかな)

お見合いの日、お互いの利益のために結婚式だけは行くと約束した。

そして、春馬君と同じマンションで二人きりで暮らすことも知らないうちに決定してしまった。結婚したと世間にお披露目すれば、別居というわけにはいかないだろう。だけど、まだ実感が湧いてこない。

なんせ見合いをして約十日ほど。それも彼と会ったのは見合いのときだけなのだ。

困惑している私に、春馬君が追いうちをかけるように言う。

「招待状はもう出した」

「え!?!」

「社長にビックアップしてもらったから間違いないと思うけど、ほら、これが名簿。もし抜け落ちがあったら早めに言って。すぐに招待状を作って送付するから」

すでに外堀を埋められ、引き返せないところまで進んでいるようだ。

がっかりと項垂れる私を見て、春馬君は妖艶な笑みを浮かべる。

「ご愁傷さま。咲良はもう、俺のモノだから」

「っ!」

「逃げても無駄だよ?」

そう悪戯つばく口にする春馬君は、文句なしに格好いい。

それが計算ずくの表情のように感じるのは、私が彼を信用しきっていないからだろうか。

お味噌汁の具を口に運んでいる間も、春馬君の真意や彼自身が気になって、目を離せない。

姿勢正しくご飯を食べる仕草は、とてもキレイだ。

若い男の人は、もつとガツガツ食べるイメージがあるのに、と好印象を持ってしまう。

私がチラチラと視線を飛ばしていることに気が付いているはずなのに、素知らぬふりをしてお味噌汁を飲む春馬君。

釈然としない思いを抱えつつ、私は春馬君を見るのはやめて、朝ごはんを早く食べてしまうことに専念した。

なんとか朝食を終え、私は今日のスケジュールを頭の中で確認しながら準備を急ぐ。

「えっと。じゃあ、私は先に出ていきますね」

「え? もう出勤するの?」

春馬君は壁時計を見て怪訝そうな顔をする。このマンションから私の勤め先までの距離を考えて、時間はまだ大丈夫だと踏んでいたのだろう。

「ええ、受付周りの掃除とかをしたいから。いつも早めに出社しているんです」

食器の後片付けなども済ませ、あとは出かけるだけの私を見て、春馬君は慌てて立ち上がった。

「それじゃあ、今日は俺も一緒に行く」

「えっと、電車だけ?」

御曹司と言われる人は、ラッシュの電車などとは無縁の生活をしていると想像していた。私は、意外に思いつつ春馬君に確認する。



すると彼は、楽しみにフツツと笑った。

「電車くらい乗るよ。咲良の勤め先と大橋ヘルシーは途中まで同じ沿線だから、一緒に行けるしね。今日は早朝会議もないし、出張もない。大丈夫」

ジャケットを羽織る春馬君は、余裕の表情だ。一方、まさか出勤まで一緒だなんて想像すらしていなかった私は慌ててしまう。

「で、でも！ 帰りはどうするの？」

何とか阻止したい私の気持ちはわかっているのだろう。春馬君は意地悪く笑った。

「ん？ 電車で帰るから心配いらぬ。ほら、咲良。行くぞ」

私の手を強引に握り、彼は鼻歌交じりで部屋を飛び出した。

駅に向かう途中、何度か手を振り払おうとしたが、春馬君は許してくれない。

根負けした私は、彼と手を繋いだまま電車に乗り込んだ。

車内でじつと立っていると、大きな手に包み込まれ、温もりを与えられているのを実感する。

こんなふうに男性と手を繋いだことは今までなかったので、ドキドキしすぎて、心臓が口から飛び出してしまいたいそうさだ。

挙動不審な私を見下ろしていた春馬君は、眉間に皺を寄せた。

「ねえ、咲良。こんなに混んでいる電車で毎日乗っているのか？」

「うん。でもまだ朝早いし、さほど混んでいないと思うけど」

あと一本遅いと、人の多さはこの比ではない。だからこそ私は早めに家を出ているのだ。

それを春馬君に告げたところ、ますます眉間の皺が深くなっていく。

「咲良が痴漢に遭うかもしれないじゃないか」

「大丈夫。今までだって一度もなかったし」

そんな心配無用ですよ、と言っているのに、春馬君はブツブツと何かを呟いていて話を聞かない。

「毎日一緒に出勤したいけど、実際無理だしなあ」

「だから、大丈夫ですって」

私を心配してくれることはとても嬉しい。でも、照れくささもあつてくすぐったかった。

春馬君は、私の心配を続けている。

「ねえ、咲良。結婚したら仕事辞めないか？ 俺、心配で仕事が手につかないかもしれない」

「大げさですよ」

真剣な面持ちで私の顔を覗き込む春馬君がおかしくて、クスクスと笑う。

笑い続ける私を見て、春馬君は面白くなさそうさだ。

彼が何か言おうとしたとき、ちょうど私たちが降りる駅に到着した。

私はこの駅から徒歩で会社へ行き、春馬君は乗り換えのはずだ。

電車の扉が開くと、私は流れに乗ってホームへと降り立つ。

そのあとから春馬君も降りてきた。そのときだった――

「キャッ！」

私は後ろから走ってきた学生にぶつかられて、よろけて倒れそうになった。咄嗟に春馬君が私を抱き寄せ、助けてくれる。

「危ないな。咲良、大丈夫か？」

「う、うん」

春馬君にギュッと抱き締められ、ドキドキすぎて胸が苦しい。

私を助けてくれた彼は、いつも以上にステキに見えた。

格好いい男の人が、ピンチを助けてくれる——物語などで恋に落ちる王道パターンではあるが、まさに今、自分がその王道に嵌りそうになる。

だけどもダメ。絶対にダメだ。

どんなに春馬君がステキだからと言って、彼に好意を抱いてはいけない。

彼には、どうしても私と結婚しなくてはならない事情がある。だからこそ、私に優しくもするし、ピンチの時には助けてくれるのだ。

彼の演技に騙されるものと内心で誓う。だけど、胸の鼓動まではどうしても抑えきれない。

「咲良、顔が真っ赤だぞ？」

「だ、大丈夫です」

「熱があるとかじゃないよな？」

そう言うと、春馬君は大きな手のひらで私のおでこに触れた。

それだけで、体温が急激に上がった気がする。

とにかく、これ以上彼の近くにいたら、色々な意味で危険だ。

まだ心配する春馬君を宥め、私は一人改札を出ようとした。ところが、彼に呼び止められる。

「咲良！」

「え？」

振り返ると、すぐ傍に春馬君が立っていた。いつの間にか走り寄ってきていたのだろう。

ビククリして目を白黒させていたら、彼は腰を屈めて私の顔を覗き込んできた。

一瞬息をのんだ私に、彼はより近づく。そして……

「なっ！」

頬に柔らかい何かに触れた。慌てて頬を手で隠す私に、春馬君は悪戯っ子のような笑みを浮かべる。

「ごちそうさま。これで今日一日頑張れる」

「っ！」

我に返ったあと小言を言おうとしたのだが、時すでに遅し。

春馬君は手を振りつつ背を向け、乗り換えホームへ行ってしまった。

手で押さえている頬が熱い。あの柔らかい感触は、春馬君の唇で間違いないだろう。

口づけられたときキュンときめいた胸が、切ないままだ。

それを誤魔化すように「平常心、平常心」と呟いたが、なかなか熱は冷めてくれなかった。